

乗車されたお客さまを、癒しと安心で照らしたい。

徳島教会 二木快哲さん

二木さんは、徳島市のタクシー会社に勤めるタクシードライバー。温和で素朴な雰囲気を書かせる二木さんが、以前は短気で自分勝手だったという。帰宅して食事の用意ができていないと妻を怒鳴り、休日はギャンブルにのめり込んでいた。それが、仏さまの教えにふれ、かけがえない生命の尊さ、与えられた環境のなかで精いっぱい自分らしさを発揮することの大切さを学んでからは、生活態度ががらりと変わったそうだ。工作中、心がけているのは、お客さまに最低3度は「ありがとうございます」と伝えること、そして、傾聴だ。病院通いのお年寄りには、「おついでしよう」と心に寄り添い、「不況で業績が上がらない」と愚痴をこぼす男性には、根気よく聞き通す。心に寄り添い走る二木さんの“傾聴”タクシーは、地域の人びとに癒しと安心をも運んでいる。



他を照らす

仕事や家事、地域の活動など、いま自分の目の前にあることに生きがいをもって一所懸命とりくみ、人さまに喜ばれることであれば、それが他を照らすいちばんのあり方だと思えます。

菩薩の行とされる六波羅蜜は布施からはじまります。身を使える人は身施を、心を使える人は心施を、財のある人は財施で人さまの役に立ち、人に喜んでもらう——そうした布施の実践こそ、明々と他を照らすことにほかなりません。

「蠟燭は身を減らして人を照らす」という言葉があります。人に尽くすことで「我」を没するのが布施の功德の一つですが、自分の行ないによって人さまが喜んでくれれば、自ら光り輝く発光体、つまり尊い灯明として他を照らしているといえます。たとえ小さな灯火であっても、いつでも明るく、あたたかな灯で周囲を照らす者でありたいと思えます。

立正佼成会